調 査 報 告

「屏風」とヨーロッパ：グラーツ・ローマ・エヴォラ・ライデン

藪田　貫（関西大学文学部）

1　「豊臣大坂図屏風」の発見

2006年10月、オーストリア・グラーツの郊外、エッゲンベルク城に長い間、眠っていた一隻の屏風が日本ではじめて紹介された。紹介したのは、エッゲンベルク城博物館からその研究を委嘱されたフランチィスカ・エームケ（ケルン大学）教授で、翌日の「朝日新聞」に一面カラー刷りで紹介され、国内外に大きな反響を呼んだ。反響のひとつは、この屏風が描く豊臣後期の大坂図の貴重性にある。織田・豊臣期の屏風を代表する「洛中洛外図屏風」や「大坂夏の陣図屏風」とも関連付けて、エッゲンベルク城の屏風の解読に大きな関心が寄せられ、2007年９月29日に朝日新聞社と関西大学の共催として行なわれた国際シンポ「新発見『豊臣期大坂図屏風』を読む」では、白熱した議論が交わされた（写真１）。

写真１　国際シンポジウムのポスター

エッゲンベルク城はオーストリアの古都グラーツの郊外に位置し、ハプルブルク家のフェルディナント２世（1619～37）に仕え、地方の郷士から貴族に成りあがったハンス・ウルリッヒHans Ulrich（1568～1634）が1625年に建てたもので、２代ヨアン・アントンJohann Anton（1610～49）が現在、見るようなバロック様式に統一した（写真２）。

写真２　エッゲンベルク城

興味深いことにハンスの活躍した時代は、豊臣秀吉（1537～98）とほぼ同時代であり、秀吉が合戦の時代を生きたように、ハンスもオスマントルコとの国境紛争に身を賭していた。グラーツ市内にはヨーロッパ有数の武器博物館（1643～45建造）があり、そこには３万点を超える武具・馬具が展示されている（写真３）。

写真３　武器博物館

その後、芸術に関心の深かった3代目ヨアン・ザイフェルトJohann Seyfried（1644～1713）は、エッゲンベルクに聖書や神話を題材にした天井画・壁絵で満たした24の部屋を作ったが、彼の死後、1716年に作成された財産目録に「インド風のスペイン屏風」と記す一項があり、これが「大坂図屏風」を指すとエッゲンベルク城博物館学芸員バーバラ・カイザー氏は考えている[1)]。

城はその後、マリア・エレオノラMria Elenora、マリア・テレジアMaria Theresia姉妹に継承されるが、エレオノラが1750年、城の内装をロココ風に改装したとき、屏風は１扇ずつ分離され、パネルとして嵌め込まれ、それを囲むように現地の画家の手で中国風の絵が描かれた（写真４）。この東洋趣味の結果、屏風は再利用され、「東洋の間」の装飾の一部として今日まで残ることとなった。

写真４　東洋の間

「豊臣期大坂図屏風」は住吉大社から堺を描いた第一扇にはじまり、宇治・醍醐を描いた第八扇に至るが、画面の中心を占めるのは、望楼式の天守閣をいただく大坂城とその城下である（写真５）。とくに注目されたのは楼門形式の北門極楽橋で、1596（慶長元）年の地震によって大坂城の建物が倒壊する中、極楽橋は天守閣とともに残り、1601（慶長5）年、秀吉を祀る京都・豊国神社に移築された。この史実によれば、屏風に描かれた景観は1596年～1601年、豊臣時代の後期に相当する。この時期を描いた作品としては、重要文化財に指定されている「大坂夏の陣図屏風」が著名で、1615年に大坂城周辺で繰り広げられた戦闘と戦禍に逃げ惑う人々を描いて「日本のゲルニカ」とも呼ばれている。

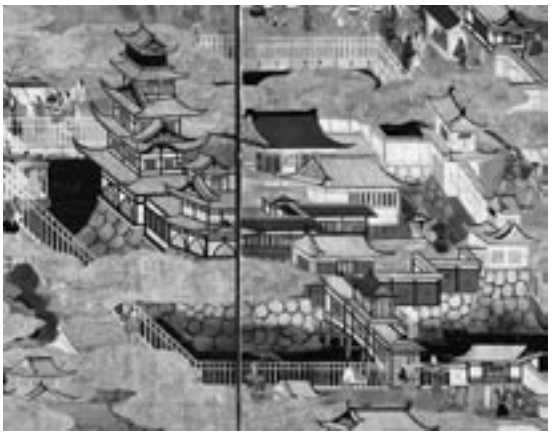

写真５　屏風に描かれた天守閣と極楽橋

それに対し、エッゲンベルク城の屏風は、豊臣の平和を謳歌する武士と町民を描き、好対照を成している（写真６・７）。あわせて豊臣大坂図を描いた作品の少なさを考慮するとき、本屏風の価値はきわめて高いものがある。

写真６　貴族女性

写真７　住吉祭

しかしながら景観年代が明確なのに対し、制作年

1）Barbara Kaiser *Scholoss Eggenberg 2002*

代は確定されていない。豊臣後期に描かれたという説とならんで、17世紀後半、徳川期の作品であるとの説もある。作者が不明な上に、狩野派の手になる「洛中洛外図屏風」などと比べたときの技法の稚拙さ、あるいはこの屏風には元になった原本があるのではないか、またペアーとなる左隻の存在の可能性など、制作事情には問題が山積している。

いまひとつの関心は、この屏風がいつ、どこから、どのようにしてオーストリアのグラーツに渡ったのか、という謎に寄せられている。

2　ヨーロッパに渡った屏風：ローマとエヴォラ

屏風に関して言えば、海外に渡った屏風として著名なのは、天正の遣欧少年使節がローマ法王に贈った「安土城図屏風」である。「安土城図屏風」とは、1580（天正８）年、時の最高権力者織田信長（1534～82）が、画家狩野永徳（1543～90）に命じて７層の天主をいただく安土城と安土の町を描かせたもので、1581年に安土を訪れたイエズス会日本巡察使ヴァリナーニAlessandro Valignano（1539～1606）に信長みずからが贈っている。ヴァリナーニは、1582年に出発する遣欧使節に委託して、この屏風を当時の法王グレゴリオ13世に届けたのであるが、その所在が長い間、不明であった。

不明の「安土城図屏風」探しを、安土城跡のある滋賀県安土町が行い、2007年２月、帰国した調査団が最終調査報告を行なった。それによれば、屏風は1585年、バチカンに届き、少なくとも1592年７月13日までバチカン美術館内の「地図の画廊」にあった。なぜそれが分かるかといえば、ベルギー人の骨董品収集家ウインゲが、その日、知人に宛てて屏風をスケッチして送った手紙を調査団が発見したからである。ところがその後、画廊は改修に入り、1750年に画廊のリストが作成されたときにはすでに屏風の記載がなくなっている。一方、安土城を描いた絵は、1736年にパリで刊行された書籍に記されており、屏風がバチカンからフランスに贈られた可能性もあるが、すでに破棄された可能性も捨てられない、というのが調査団の見解である。

ところで16世紀後半、屏風が多数、ヨーロッパに贈られていたことについて、イエズス会宣教師フロイスLuis Frois（1532～97）の証言がある。フロイスは布教史の作成を命じられ、1587年、第１部を完成させ、『日本史』と題したが、その一節でつぎのようにいう。

> 壁はヨーロッパにおけるように飾り布タペサリアを用いることなく、すべて屏風と称させる一種の装飾品で飾られる。屏風のいくつかはすでにポルトガルとローマへ送られており、毎年、インドへ多量に船で積み出される。これらの屏風はすべて黄金塗りで、そこに種々の絵が描かれている（『日本史』）。

こうして屏風は、ポルトガル語のBiomboとして、ヨーロッパで広く愛好されるようになっていったが、その象徴が、バチカンに渡った「安土城図屏風」である。ところがこの頃の屏風とヨーロッパとの関係を示すものに、もうひとつポルトガルの都市エヴォラの大司教邸内図書館に所蔵されていた屏風がある（写真８）。

写真８　エヴォラ図書館の現況

エヴォラ屏風は、1902（明治35）年、東京大学史料編纂所教授村上直次郎が発見したもので、破損した屏風の「下張り文書」として注目されたのである。その中に「司Ｐｅ（パードレ）の御屏風」と屏風作成を命じる内容が含まれ、あわせてイエズス会宣教師オルガンチーノの名前が記されていた（写真９）。

オルガンチーノOrgantino（1532？～1609）は1570年に来日、フロイスを助けて布教に従事し、とくに織田信長に厚遇されて、安土城下にセミナリを開設しているが、村上はオルガンチーノの事跡をもとに、エヴォラの大司教に贈るべくオルガンチーノが屏風の作成を指示したと推定した。当時、エヴォ

ラは大司教ドン・テオトニオDom Theotonio de Braganca の居所で、1584年、大司教はリスボンからローマに向かう遣欧少年使節を歓待したばかりか、『イエズス会士日本書簡集』の発刊にも尽力している。これらのことから村上は、屏風を遣欧使節から大司教に贈られたものと判断したのである[2)]。

村上によれば「昔は金屏風であったろうが、紫絹に桐の模様を出した縁が残り、下張りや骨まで露出したもの」という有様であった。わずかに「離れ離れの五扇で、一扇の大きさは175センチに62センチ」との情報を記しているが、描かれた絵については一切、情報がない。

写真９　パードレ書状

ところがその後、1941年、エボラ図書館長によって再度、屏風文書が発見され、1963年、渡欧した松田毅一によってその全容が採録、紹介されることとなった[3)]。それによると、エヴォラの屏風文書には、村上の紹介した少数の古文書とは別に、７段に綴じられた69枚の文書（ほぼ一曲の下張りすべて）であった。文書は現在、すべて一枚ずつ分離され、修復保全され、原状を留めていないが、幸い、当時の図書館長によって原状が撮影されており、下張りの蓑掛け状態を確認することができる（写真10）。しかもその内容は、「ヴァリナーニのカテキズモ Catechizmus Christianae Fidei」「オリガンティーのイルマンの心得」といったイエズス会の日本布教を示す貴重な文書群で、松田毅一と海老沢有道の綿密な考証によって1580年～87年の間に書かれたものと推定されている。さらに新出の下張り文書が、200センチに150センチという大きさであることから、エヴォラには二種類の屏風があったと指摘する。

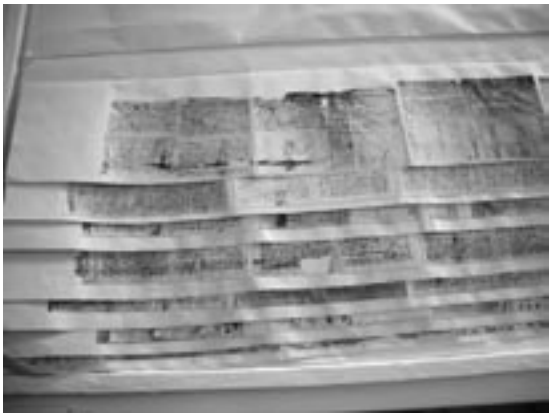

写真10　下張り文書写真

あわせてエヴォラ大司教への贈り物には、屏風が含まれていないというフロイスの記述（『九州三侯遣欧使節行記』）から、大司教への遣欧使節の贈り物という村上の説を退け、どこかからエヴォラ図書館に持ち込まれたものかは不明としている。

ところがエヴォラの屏風には、さらなる歴史があった。村上は、エヴォラ屏風の話をリスボンの公開図書館（当時、現在ポルトガル国立図書館、Biblioteca Nacional de Portugal）で聞いたが、その時、オルガンチーノやビセンテ宛の「数通の文書」を見せられ、それらが「エヴォラの図書館にある屏風が毀損して、その内部から出たもの」との説明を受けている。いうなればエヴォラ屏風からでた文書は、エヴォラ公開図書館に保管され、1963年、松田によって全容が紹介されたもの（Ｘ）と並んで、リスボンの公開図書館で村上が見たもの（Ｙ）の二種類があったことになる。それを松田は、下張り文書のサイズから、それらは別々の屏風から出たものと判断したのである。

ところがリスボン公開図書館のもの（Ｙ）は、村上以降も、岡本良知・幸田成友らが訪問したにもかかわらず、長らく行方不明であった。もちろん松田も訪ねているが、国立図書館で発見することはできなかった。

それが突然、1983年になって顔を出すこととなった。再発見の栄誉に欲したのは、在外研究を利用して訪欧していた中村質で、彼によって、57枚からな

2）村上直次郎「エヴォラの大司教と金屏風」（『日葡通交論叢』、1943）。
3）松田毅一・海老沢有道（『エヴォラ屏風文書の研究』、1963）。

る下張り文書が精査されることとなった[4)]。中村は剥離前の下張りをチェックした上で、松田と同様に水に浸して剥離した。それによれば下張りは、サイズの異なる６扇からなり、紙数は大小57枚であった。中村は、さらにそのすべてにタイトルを与え、手紙には判明する差出と宛名を列記した。その詳細は、論稿「豊臣家臣団とキリシタン」に詳しいが、なによりも重要なのは、大小の文書の何枚かが、松田が紹介した文書と内容・形状ともにぴったりと照合したことである。これはとりもなおさず、エヴォラ公立図書館とリスボン国会図書館の下張り文書が、同一の屏風から出たものであることを意味する。エヴォラ大司教邸の金屏風は一つで（おそらく６曲）、その１曲がエヴォラ、もう１曲がリスボンに残され、松田と中村という日本人研究者の手によって完全に剥離・調査されたのである。

この下張り文書の中で中村が特に注目したのは、秀吉の家臣でキリシタンでもあった安威五左衛門志門である。なぜなら両文書から確認できる35通の書簡のうち、安威宛が14通と断然、多いからである。その内容に深入りすることは避けるが、このことは屏風の下張り文書が、「安威家から提供された古反古」（松田）の可能性を高くする。中村も「屏風文書が秀吉の右筆・奏者・代官で、シモンの霊名をもつ安威五左衛門家から出た可能性が大である」という。中村によれば安威は「秀吉没後、秀頼に仕え、慶長16年には生存が確認されるが、その後、大坂の陣までの間に断絶したらしい」。

こうしてエヴォラ屏風は、特徴ある下張り文書から、近世初期対外関係史やキリシタン史の上で大きな資料的価値をもたすことになった。ところが不思議なことに、描かれた屏風絵が欠落することからか、屏風の表である屏風絵や、いつ、どうしてエヴォラに渡ったのかという点については、まったく問われていない。オルガティーノがエヴォラ大司教への贈り物として書かせたという村上説が否定されて以後、一切、言及がないのが実情である。

エヴォラの金屏風は一体、いつ描かれ、いつエヴォラに届けられたのであろう？

こういう関心から、修復された両文書を仔細に見てみると気になる点が少なくない。

第一に、残された屏風の縁からは、絵は縁を残して切り取られた可能性がある（写真11）。ということは絵の部分は、転用された可能性がある。

写真11　切り取られた縁

第二に、残された縁の織物五七の桐模様はそれほどの良質とはいえない代物である。

第三に、「天正13年を中心に前後１，２年のもの」（中村）とされる書状にも関わらず、それらの数点に、裏書が異筆で見られる。たとえばリスボン文書なかのフロイスのポルトガル語書簡には「夏山のみねの・・」という和歌があり、エヴォラの文書にも漢詩「行盡江南」の裏に「此程の大地震貴辺如何承」と手紙の書き出しがある。これらは、字体から見ると近世初期に遡るものと考えられない（写真12）。

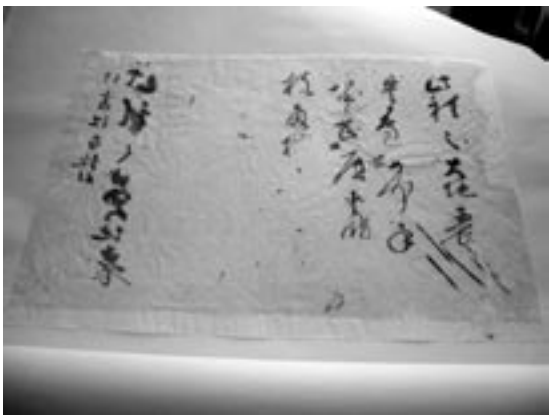

写真12　地震見舞い状

ということは安威家から出た文書（反古紙）は、さらにどこかで再利用された後、屏風の下張りに再々利用されたと見るのが自然であろう。こういっ

4）中村質「豊臣家臣団とキリシタン―リスボンの日本屏風文書を中心に―」（『史淵』124、1987年）。なおこの論文では、36に分けて断簡を含む全文書が翻刻の上、考証されている。

た時間差を考慮するとき、エヴォラ屏風は近世の中・後期の作品であると考えることも可能である。

いずれにしてもエヴォラ大司教→屏風→キリシタン文書という脈絡から、短絡的にエボラ屏風のヨーロッパ渡来を近世初頭に位置づけることは危険である。

3　近世の対外関係と屏風

さて、日本からヨーロッパに贈られた屏風の経緯が、残された屏風とともに知れるのは、現状では19世紀を待たなければならない。サントリー美術館・日本経済新聞社主催の展覧会「Biombo 屏風―日本の美」は、日本文化における屏風の成立と展開を示すとともに、朝鮮国王に対して進物として贈られた「贈朝屏風」や、幕末にオランダ国王ウイレム２世WilliamⅡらに贈られた「贈蘭屏風」などが里帰りし、大勢の観客の目を楽しました[5)]。

当時、「通信の国」として国交のあった朝鮮には、1617年に来日した第２回通信使に金屏風15双が贈られたのをはじめとして、1811年の第12回通信使まで連続して贈られ、その数は190双に及ぶという。「通商の国」であったオランダに対しては、1845年の国王ウイレムⅡ世、および1856年のウイレムⅢ世への贈呈が知られる。とくにウイレムⅢ世へ贈呈された屏風10双は、オランダのライデン民族博物館にすべて現存している。

これらの屏風は幕府の命を受け、狩野派や土佐派の御用絵師たちが描いたもので、「富士牧狩図」のような武者絵、「四季耕作図」のような風俗図、「苅田雁秋草図」のような花鳥図が描かれたが、いずれも豪華な金屏風である。

遣欧使節が日本に戻った1590年、すでに織田信長は死去、跡を受けた豊臣秀吉はキリスト教への弾圧を強めていた。キリスト教禁圧政策は、その後、徳川家康と徳川幕府に引き継がれ、17世紀には、イギリス船とスペイン船が、それぞれ通商を諦め、日本を去っている。最後に残ったポルトガル船も、1639年には徳川幕府の命によって、来航を禁止された。その後、アメリカ合衆国ペリー提督が来日するまで、日本に来航が認められていた西洋船は、わずかにオランダのみである。したがってエッゲンベルク城の屏風がいつ、どのようにして日本からオーストリアに渡ったかについては、①1639年以前に、ポルトガル・スペイン・イギリスなどの手によって渡ったのか、それとも②その後、新教国オランダの手によってオーストリア・ハプスブルグに渡ったのか、大きく二つの解釈が可能となる。この問題の解決のためには、ヨーロッパ内の屏風調査を通した「屏風ロード」の解明が不可欠である。

〔後　記〕

本稿は、2008年９月16日から19日にかけて、ポルトガル・リスボンのマカオ文化センターCentro Cientifico e Cultural de Macauで開催された日本資料専門家欧州協会European Association of Japanese Resource Specialistsの第19回大会で報告したものである。報告は英語で行なったが、ここには日本語原稿を収めた。英文報告は、同協会のホームページに掲載されている。http://japanesestudies.arts.kuleuven.be/eajrs

またエヴォラ文書の調査にはEAJRS会長W.Vande Walleカトリック・ルーベン大学教授、ならびに国立図書館とエヴォラ図書館の協力を得、とくにエヴォラ図書館では資料撮影を特別に許可された。明記して謝意にかえたい。

５）サントリー美術館『Biombo 屏風―日本の美』、2007。